

ヘロデとメアリアムを巡るアダプテーション： 『ミラノ公爵』と『メアリアムの悲劇』

吉 田 季実子

1.

1602年にトマス・ロッジ (Thomas Lodge) による英訳版が出版された、フラウィウス・ヨセフス (Flavius Josephus) の『ユダヤ古代誌』 (Antiquitates Judaicae)、『ユダヤ戦記』 (Bellum Judaicum) の中のヘロデ王 (Herod the Great) と二度目の妻メアリアム (Mariam) とその一族の物語を基にしてルネサンス期のイギリスでは少なくとも2作品の戯曲が作られたことが知られている。¹

その一つは、職業劇作家、フィリップマッシンジャー (Philip Massinger) の『ミラノ公爵』 (The Duke of Milan) であり、もう一つは出版のために書かれたのではない、フォークランド副総督夫人、エリザベスカアリ (Elizabeth Cary, Viscountess of Falkland) によるクローゼットドラマ、『メアリアムの悲劇』 (The Tragedy of Mariam) である。この論文では、同一の材源を持ち、ほぼ同時代に書かれたこの2戯曲のアダプテーションとしての差異、そしてその中に現れている筆者独特の問題点について論じることを目標とするものである。

2.

ケアリ、マッシンジャーの著作がともに、ヨセフスの歴史書の記述を元にしていうことは、ヨセフスの著作の英訳がイギリスで出版された年とこの2戯曲が書かれた時期との前後関係からも明らかである。両作品ともに、多少のキャラクターの書き加え、変奏はあっても、骨子となるメアリアムの死と彼女を取り巻く人間関係に限って言えば、ほぼこの材源に忠実であるといつてよい。本章ではその材源であるヨセフスの2著作における歴史的事実からなる人物の関係性の確認、および登場人物の特徴、ヨセフスの著作の確認を行う。

ユダヤの歴史家であり、エルサレムの名門に生まれたフラウィウス・ヨセフスは紀元1世紀 (37～100年頃) を生きた人物であり、対ローマの戦争にユダヤの指揮官として参戦、敗戦後ローマで『ユダヤ古代誌』と『ユダヤ戦記』を著した。そのうち、『ユダヤ古代誌』では14巻から17巻、『ユダヤ戦記』では1巻がヘロデの治世に割かれている。『ユダヤ戦記』によればヘロデの没年は紀元前4年であり、ヨセフスの著作活動は彼の死後半世紀以内のことである。『ユダヤ古代誌』全20巻は天地創造に始まり、紀元66年のユダヤ戦争直前までの記述がなされており、一方、『ユダヤ戦記』ではアサモナイオス朝の衰退からヘロデの登場に端を発している。

まず、『ユダヤ古代誌』では16巻でヘロデがメアリアムの属するアサモナイオス王家による支配を終わらせるところからはじまっている。この材源においてヘロデは優れた王であり統治者であるとされているが、一方でアサモナイオス王家に関しても「この一家は、王族としての高貴さと、祭司としての品位とをあわせもち、さらに始祖たちの民族のために成し遂げた業績も加わって、光輝ある、名声高き一家であった。しかし彼らは、この王族の権威を一族内の抗争によって失い、それを一平民の、かつては歴代のアサモナイオス家の王に奉仕した家に生まれた、アンティパトロスの子のヘロデに渡したのである。」²と極め

て公平な視点から歴史的事実として記述されている。また、メアリアムに関してはヘロデの婚約者であり、「アリストプロスの子、アレクサンドロスの娘」³としてのみ記述がされている。そのうち、ヘロデの統治下ではメアリアム（ヨセフ著、秦訳ではマリウムメ。以下、本稿ではメアリアムで統一する）の母アレクサンドラが自らと息子、娘の地位のためにヘロデに対する陰謀を画策し、陰謀をめぐるクレオパトラとアントニオスに接近しようとする様が描かれている。その後のエピソードがいわゆるヘロデとメアリアムの悲劇の発端となる部分である。ヘロデはメアリアムの貞操を守ることが自らの名誉を守ることであると理由から自らが処刑された際にはメアリアムをも処刑するようにと密かに命令を下す。しかし、この命令はメアリアムの知るところとなり、ほぼ同時期にヘロデ死亡の噂が流れたためにアレクサンドラはメアリアムを連れてローマ軍のもとに避難し、あわよくばアントニオスの力を借りて王権を得ようともくろむ。しかし噂とは反対にヘロデは無事に帰国し、アレクサンドラ等の計画はヘロデの妹サロメと母によってヘロデに告げられてしまう。ヘロデとメアリアムは一旦は和解するも、メアリアムがヘロデの下した命令に対し、「何の罪もないわたしまで殺せという命令を出すのは、本当に愛している者の態度とは言えない」⁴とヘロデの不変の愛の誓いへの返答に異議を唱えたことからヘロデは再び激怒する。以前と同様の命令をヘロデは再び発したので、メアリアムは夫への怒りを募らせ、彼への軽蔑と生まれゆえの優越感が嫌悪感へと繋がってしまうのである。メアリアムは「他の面では賢明な女性であり、夫にたいして忠実であったが、しかしその性質には、女らしいが同時に残忍なところもあって、愛情の虜となっているヘロデを大いに愚弄した。そして、自分は王の過信であり、また彼は自分の主人であると、場合によってはそう考えて行動すべきときでも、そのような考慮は全く払わず、傲慢な態度、不遜な言動を示すこともしばしばであった。」⁵最終的にサロメの計略により、メアリアムは毒殺を画策したとの疑いにより死刑の宣告を下される。メアリアムの処刑についてヨセフは以下のように記述している。「マリウムメ自身は、神色自若、平然たる態度で死を迎え、その最期の瞬間まで、見る人に高貴の末裔であることを示した。ときには理性を欠き、またあまりにもその性格が攻撃的であったとはいえ、抜群の自制心と比類のない余裕のある精神力とをみせた女性マリウムメはこうして死んだ。（中略）彼女はただ自由奔放にその思うことを口にしてきた。そして彼女は、自分の近親者たちに起こった事件にその心を痛めたが、そのときの彼女は、自分の感情のすべてをヘロデに語ることは、当然、許されてしかるべきことと思っていた。」⁶この後、ヘロデの苦悩、アレクサンドラの処刑でメアリアムの死を巡る物語は終わっている。一方、ほぼ連続的にサロメの2度目の夫、コストバロスの処刑が語られている。サロメがユダヤの律法では禁止されている女性からの離縁の申し渡しを行い、兄、ヘロデに讒言して彼は処刑され、ヘロデの治世はより安泰なものになる。

以上確認したように、材源とされるヨセフの著作ではヘロデの統治するユダヤはローマの執政者との密接な関係性の上に成立している流動的な国家であり、その安定を築くべく努力する優れた施政者としてのヘロデの一面が、残虐性以上にクローズアップされている。また、その一方で、死の間際には美点が強調されているものの、メアリアムは傲岸不遜で軽率な女性であるかのように描かれており、その母であるアレクサンドラの実存感と陰謀への精力的な参画はこれら一連のエピソードの中でヘロデ以外のどの男性よりも強烈な印象を与えている。それと比較した場合に、サロメの陰謀は家庭内の問題にのみとどまっているが、むしろアレクサンドラと同じくらいに国政に影を落としているのがクレオパトラの実存感である。ユダヤ・ローマ間の外交、あるいは内政干渉の際に媒介となるのはクレオパトラであり、アレクサンドラ同様に彼女の感情がユダヤの置かれる状況を左右しかねない状態であったといつてよい。

これらのヨセフの著作において、ヘロデは国王としては偉大であったが、その偉大さが損なわれるのは偏に家庭内、宮廷内の問題を巡ってであり、男性のプライベートな領域に潜む危険性が示唆されている。その一方でその公の場である国政を脅かすのは女性の関与であり、特に私的な問題の延長上に公の問題を位置づけようという女性の存在が為政者の男性を脅かす危険性がこの材源において指摘されているといえるだろう。なお、『ユダヤ戦記』ではこの経緯がより簡略化しているが、プロットの概略には変化は見ら

れない。

3.

マッシンジャーの『ミラノ公爵』はヨセフスのメアリアムの死のプロットに題材を得て、舞台を16世紀初頭のミラノの宮廷に移した戯曲であり、1621年から22年の間に執筆され、1623年以前にブラックフライアーズにて国王一座による上演記録の残っている作品である。夫が自分を殉死させようとしていると知ってしまった妻が夫への不信感や憤りを抑えられず、生還した夫が彼女の不服従に不貞の可能性を見出し、嫉妬ゆえに妻を殺害してしまうというメインプロットはそのまま移植されているが、マッシンジャー作品ではさらに悪党的人物の暗躍や、いささかコミカルともいえる騒乱を書き足され、職業作家ならではの娯楽性の高い作品に仕上がっているといえる。以下にその概略を示す。

ミラノの公爵ルドヴィーゴ・スフォルツァは敗戦で死を覚悟し、皇帝カルロスのもとに赴くが、その際、自分の処刑時には婦人であるマーセリアをも処刑するという命令をくだす。その命令はマーセリアを誘惑しようとする、公爵の妹マリアナの夫であるフランシスコの口からマーセリアの知るところとなり、彼女は夫への怒りをつのらせる。一方で、マーセリアに拒絶されたフランシスコは彼女に誘惑されたとして、公爵の夫人への怒りをかき立てる。嫉妬に狂い、彼女を憎悪した公爵の手に掛かって夫人は殺害される。が、彼女の死に臨んでフランシスコの裏切りが明らかになる。フランシスコはかつて公爵に捨てられたユージニアの兄であり、彼自身の報復は半ば達成された事になる。彼はさらに哀しみのあまり半狂乱になってマーセリアの復活を信じる公爵をも異に懸けるために医師に変装して、助手に変装させたユージニアを従えて、マーセリアをよみがえらせる秘術を行うように見せかけながらマーセリアの遺体に毒の化粧を施す。その結果、騙された公爵はマーセリアの遺体に口付けて毒に侵されて死亡し、フランシスコは妹の復讐を完遂するのである。

材源のヘロデにあたるのが公爵ルドヴィーゴ・スフォルツァ、メアリアムにあたるのがマーセリアであることは明らかであるが、マッシンジャーの作品において独創的なのはなによりも悪役であるフランシスコの造形であるといつてよい。材源に特有であった、ヒロインの母、アレクサンドラの暗躍や、皇帝＝アントニオスの影で活躍するクレオパトラなどのプロットに陰を落とす女性キャラクターが登場しない代わりに、その穴を埋めるかのごとくにフランシスコは変装してまで陰謀のプロットをリードしつづける。その一方でヒロインであるマーセリアは外見的な美しさと、夫である公爵の血統に対する優越感などの傲慢さも含めた浅はかさが見え隠れしており、ヨセフスの材源にあったような気高いイメージとは程遠い造形になっている。公爵の人物像については材源のヘロデ像の英雄的な部分が反映されており、信義に厚く、施政者としても優れている一面が描かれており、暴君のイメージをも併せ持つ材源よりも肩入れをされているような印象さえ与えている。

作者であるマッシンジャーが男性のプロの劇作家であること、そして彼の著作におけるコミカルな風刺や、いささか直接的かつ扇情的な女性表象、そして男性優位で女性蔑視的な思想を持つ男性キャラクターを好んで描いたことなどを考え合わせると、このヨセフス作品の変奏にはマッシンジャーのもつ特徴が表れているといえる。たとえば、公爵と公爵夫人マーセリアの関係においてマーセリアに耽溺する公爵の直接的な表現は材源よりもより露骨であるといえる。また、ヨセフス版と比べて、政治的な野心を持つ女性がおらず、女性たちを動かすのはもっと感情的な問題であり、女性が国家の脅威とはなりえない点も、ミソジニー的な視点のあらわれであろう。しかし、その一方で典型的な悪党であるフランシスコを悪事に駆り立てる動機も大義や政治的な理由などではなく、妹の復讐というきわめて個人的な理由である。彼自身の変幻自在な行動は非常にエンターテインメント性の強いものであり、その点にプロの劇作家としてのマッシンジャーの力量がにじみ出ているが、ほとんどのエピソードが個人の問題内に収まっており、名誉や

一族の存続をかけた問題が存在しないという点も材源に比べて多少卑近な印象を与えているといえる。

1604年にシェイクスピアの *Othello* が書かれたことも考え合わせると、イアーゴ的な悪党であるフランシスコの造形は、レトリックを駆使し、他者の妄想を掻き立ててプロットを進行させるも最終的には自らも破滅するイアーゴの像が投影されているようにも思える。しかし、*Othello* との決定的な差異は女性キャラクターの非力さであり、また後半のフランシスコの変装の策略にいたってはもはやコミカルなほどであって、シリアスな悲劇というよりは悲喜劇を得意とした作者の手腕が十分に発揮されている。このように非常に存在感の強い男性の悪党がおり、一方で女性キャラクターは非力であり強い影響力を他者に及ぼすことが出来ず、またごくプライベートな空間にのみ存在しており、反対に男性キャラクターはパブリックな場でその力を十分に発揮し評価を得ている。その点に上演当時での観客による需要と、職業劇作家マッシンジャー独特のミソジニーの色合いが感じられるのである。

フィリップ・マッシンジャーは単独作よりも共作の多い劇作家であり、1621年から22年に書かれた *The Maid of Honour* が、彼が単独で書いた作品のうち一番古いものであるとされており、したがって、『ミラノ公爵』も初期の作品であるといえる。1616年にはジョン・フレッチャーと共同で劇作を行っていたことが知られているにもかかわらず、1647年に出版されたボーモントとフレッチャーの戯曲集には彼の名前は表題に挙がっていない。1625年には国王一座の座付き戯作者として活躍をしたことが知られていて、その後1640年に死去するまでに20作もの悲喜劇や喜劇を遺している。全体での作品数は33作とされており、そのうち18作が共作、15作が単独作とされているが、作品数には諸説あり、55作に携わったという説も残されている。⁷ マッシンジャーの作品は、多くの批評家が指摘しているようにジャンルの分類が非常に困難である。また、その文体にも明確な特徴があるわけではなく、ただ、現存するマッシンジャー作品からは風刺の効いた喜劇を書ける劇作家であるとの評価が与えられているといっていよう。

4.

『メアリアムの悲劇』はフォークランド副総督ヘンリーケアリの妻、エリザベスによって1602年から1613年の間のいずれかの時期に執筆された戯曲であり、この戯曲はマッシンジャーのものとは異なり、時代背景も人物の相関もほぼ材源のヨセフスに準拠している。ただ、着目すべきはエピソードの時系列の若干の変化と、登場人物の重要度の意図的な書き換えであるといっていよう。この戯曲の主人公であるメアリアムの死自体を巡るプロットには書き換えはほぼないが、財源と比べてメアリアムの母アレクサンドラの比重が下がり、策略をめぐらすのはもっぱらサロメである。もちろん、ヨセフス版でもサロメは姦計をめぐらし、メアリアムの処刑を勧めるが、ケアリ版のサロメはメアリアムの一件以上に、自分の離縁と恋愛に関して智慧をめぐらせて物事を有利に運ぶのである。サロメは、コストバロスと結婚していながらアラブの王子シリウスと恋におち、彼と再婚すべく、コストバロスとの離婚を画策する。ケアリ版でも当時の女性からの離婚の申し立ての不可能については言及があり、サロメはその法を不平等なものと考えて、男性中心の律法に異議を申し立て、自ら因習を破壊するものとなって門戸を解放したいという宣言をするのである。

Why should such privilege to men be given?

Or given to them, why barred from women then?

Are men than we in greater grace with heaven?

Or cannot women hate as well as men?

I'll be the custom-breaker and begin

To show my sex the way to freedom's door. (1.4.45-50)

上記のようなサロメの激しい宣言は、単なる敵役のセリフとして以上にサロメのヒーロー的、あるいはフェミニスト的な一面を如実にあらわしている。貞淑でありながら自分の意見を主張し続けるメアリアムとはまた違った形で、男性社会に挑戦しようとするサロメは材源をさらに発展させた形であり、材源のヘロデの影が薄くなった分、もう一人のヒロインとして浮かび上がってきているといえる。そして、夫を怒らせることで離婚を申し入れられようとし、ついにはババの息子の隠匿問題で夫を処刑することに成功するのである。このサロメの陰謀のプロットは材源ではメアリアムの死後に起こる出来事であり、このエピソードをメアリアムの生涯の中に意図的に絡めた、さらに比重の高いエピソードの一つとしたところにケアリ自身の姿勢、すなわち女性からの自主的な離婚の申し渡しという行動への興味が読みとれるのではないだろうか。同様に、ヘロデの兄のフェロラスと女奴隷グラフィナの恋愛もメアリアムの事件と同時平行で起こることになっており、従順な女奴隷であるグラフィナ像は材源にはないものであって、サロメとメアリアムといういわば非・従順な二人の女性の逸脱ぶりをより明らかにするためのエピソードとして配置している*。

また、人物の比重を変化させていく過程の一つとして、メアリアムを徹底的に善人、いわば殉教者的に描いていることもケアリ版の特色といえる。ヨセフス作品のメアリアムはサロメやその母の血統に対し、優越感を抱いており、それが二人の女性の葛藤の根源であるかのように描かれているが、メアリ作品ではメアリアムと身分差を巡って複雑な感情を持つのはむしろ、ヘロデの前妻ドーリスである。もはやヘロデに対して影響力を持ち得ないドーリスとメアリアムの葛藤は、なんらメアリアムを損なうものではなく、むしろドーリスはサロメが因習を破ろうとする男性のみに離縁の自由が与えられている社会の被抑圧者の一例であるということのみが強調される。そしてまた直接的な原因の見出されない女性同士の悪意の存在がサロメというキャラクターに強烈な印象を与えている。一方、メアリアムに関してであるが、たしかにヨセフス作品でもメアリアムの臨終の様は劇的かつ荘厳なものとして表現されているが、ケアリ版のメアリアムはそれ以上に高慢さよりも賢明さ、貞淑さの勝った女性として描かれている。これは、ヒロイン像を明確にすることで受難する女性を主人公とした悲劇の度合いを高めているという効果のみならず、作者が意図的に比重を重くした登場人物、サロメに悪女としてのより強い印象を持たせるべく二人の女性像にコントラストを持たせる効果を生んでいるといえる。

また、ケアリによる翻案で何よりも特徴的なのはコーラスの使用である。ケアリ版では各幕にコーラスの視点が挿入されており、コーラスは時に前幕の内容を要約し、また時に登場人物、特に主人公であるメアリアムの言動を批判するという形でこの作品の言説を複雑化させているといってよい。特に批評上問題とされ、注目されているのは以下のコーラスによる主張である。

'Tis not enough for one that is a wife
To keep her spotless from an act of ill,
But from suspicion she should free her life,
And bare herself of power as well as will.

'Tis not so glorious for her to be free,
As by her proper self restrained be.

[.....]

And every mind though free from thought of ill,
That out of glory seeks a worth to show,
When any's ears but one therewith they fill,
Doth in a sort her pureness overthrow.

Now Mariam had, but that to this she bent,
Been free from fear, as well as innocent. (3.Chorus.1-6, 31-36)

このコーラスの解釈については様々に別れており、ケアリ自身の貞淑で堅実な人生の投影としてとらえて、筆者の考えとしてそのまま取るというケース、逆に伝記的事実からケアリを進歩的な自立した女性、いわばフェミニストとして捕らえた上であえて社会の規範に迎合する姿勢をとることで自身のスタンスを明らかにすることを避けているとするのが主流であるが、いずれにせよケアリが新たに導入したこのコーラスの問題がケアリ版のメアリアムの解釈に多様性を与え、特徴的なものになっていることは確かである。

以上見てきたように、ケアリによるヨセフスのメアリアムの物語の翻案は、男性登場人物の印象をおさえ、女性登場人物に光をあてることで歴史上の1エピソードであったメアリアムの死のプロットを男性中心社会における抑圧された様々な女性群像、および彼女らの葛藤へと関心事を向けたいわばフェミニズム的作品の先駆であるといえる。しかし、その中で筆者ケアリ自身の主張を見出すのは決して容易なことであるとはいえない。なぜならば、作者は受難のヒロイン、メアリアムだけでなく、彼女に危害を及ぼそうとする悪女サロメをも進歩的な闘争心に満ち溢れた自律的女性として肯定しているのであり、同時にヒロイン、メアリアムをもコーラスの言説の中でその逸脱性を否定しているからである。メアリアムの貞淑さとその受難に作者が自己投影している可能性についてはしばしば言及されているが、一方で正面から抑圧されている自己を解放し、社会の規範に対抗しようとしているサロメもまた、作者の願望を担っているともいえる。そして、その両者を批判するコーラスは、それでも規範から逃れられないジレンマに陥ってしまっているケアリ自身の声とも考えられるのではないだろうか。

フォークランド副総督ヘンリーケアリの妻、エリザベスの生涯については彼女の後にカトリックの修道女となった娘の手によって残された伝記に詳細に述べられている。その中でも特に問題とされる出来事は彼女のカトリックへの改宗事件である。伝記、*Lady Falkland: Her Life* においてケアリは才女の誉れ高く、また非常に信心深い、いわば理想的、規範的な妻であり母である女性として表象されている。一方で同時に、彼女の改宗事件を巡る夫や長男との対立は、ケアリがただ従順な女性であったというだけではなく、自律的な人物であり、そのこと自体が当時としては逸脱と目されていたにもかかわらず、伝記の中では賞賛されていることも注目に値する。もちろん、彼女と夫との対立の一番の原因は宗教的な問題であり、伝記の筆者の視線が母親よりであることはやむを得ない問題であるが、ケアリ本人に関してはそれ以外の資料においてもその見識の高さは賞賛されており、伝記に現れているケアリ像は信じるにたるものであると言ってよいだろう。

後年の改宗問題を巡る夫との諍いが有名であるために、『メアリアムの悲劇』におけるフェミニスト的な主張がそのまま彼女の現実と重ね合わせて考えられがちであるが、実際は、この作品が書かれたのは彼女が夫のもとに嫁いで間もない時であり、夫との関係の悪化や、結婚生活の中での抑圧はそれほど顕在化していた時分とは考えにくい。したがって、むしろ彼女が自らの経験によってフェミニスト化していったのではなく、そもそも結婚前から原発的に自律した女性としての意識を秘めていたと考えるほうが自然であろう。現在、ケアリはフェミニスト劇作家の先駆者の一人としての評価も受けつつある。後年、改宗後には夫や息子からも非難され、抑圧された人生を送らざるをえなかった中でもあえて自らの信仰を改めなかったと伝えられているケアリ、そして自律的な女性であり、女王の宮廷の教養の担い手の一人であったとされるケアリは唯一、現存する戯曲である『メアリアムの悲劇』の中で男性中心社会に対する疑問を彼女なりの形で意図的に呈示している可能性は否定できないのではないだろうか。

マッシンジャーとケアリの著作を翻案として比較すると、マッシンジャーの作品ではメアリアムの死の件のみが材源のプロットに忠実であるのに引き換え、ケアリの作品ではそれ以外のサロメを中心とするエピソードをやや強引にメアリアムの死のプロットに絡めているところに特に大きな改変が見られる。そしてその中でも特に顕著なのが登場人物の造形であって、そこに投影されているのはそれぞれの筆者のジェンダー観である。

端的に言えば、マッシンジャー作品でプロットを動かすのはフランシスコであるが、一方、ケアリ作品ではサロメがその役割を担っている。そして材源では特に誰の策略というのでもなく自然発生的な嫉妬と猜疑心の連環によって悲劇が起こっているともいえる。同様に、マッシンジャー作品では女性登場人物が往々にして非力であり、策略に唯巻き込まれるままであるのに対して、ケアリ作品ではむしろ男性登場人物は女性たちの織り成す人間模様巻き込まれ、操られるのに過ぎないのである。劇中でプロットを動かす、劇作家的、演出家的登場人物が実際の作者とジェンダーを同じくするというこの現象によって、劇中のエピソードが劇中劇化していることが顕在化するのである。

また、その一方で特にマッシンジャーの作品では材源のヘロデに見られるような英雄的男性像が公爵に継承されており、その反面、公爵夫人にはメアリアムの高慢な部分そのまま継承されており、材源にあるような貞潔の誉れ高い模範的な淑女という側面はいささか薄まっている。逆にケアリ作品ではヘロデの嫉妬深く暴君的な一面がクローズアップされており、メアリアムは夫への愛情を持った聖女のような女性として美化されており、その点においては材源で称賛されているメアリアム像そのままである。この点においても、劇作家達がそれぞれ自分と同性の登場人物を正当化し、感情移入している様子があらわれている。

いずれの作品においてもメインプロットはヒロインが嫉妬した夫によって殺害されるという女性の受難の物語であるが、そのメインプロットであるヒロインの死を巡っても二人の作者の特徴が顕著にあらわれている。まずケアリ作品であるが、ヒロインの死はあたかも殉教のように描かれており、またメアリアムの復活をも示唆しているくぐりキリストの復活を思いおこさせる。メアリアムは敬虔なカトリック信者として知られているために、このエピソードを追加することは彼女のキリスト教への関心の高さを示しているが、それだけでなくメアリアムの無実の死が聖別されることで、受難のヒロインとして高慢の罪は消え、コーラスによる彼女への批判の印象も薄まって結果的にメアリアムの立場が正当化されることになる。一方、マッシンジャー作品でも復活のモチーフは登場するが、あたかもケアリ作品のパロディーであるかのように、そのエピソードはフランシスコの公爵暗殺の小道具としてのみ作用している。ヒロインである公爵夫人の遺体に関する描写はひたすらフェティッシュで、この作品において公爵夫人は死して尚、語られる対象としてのみの存在にとどまっており、彼女の死という出来事自体は何の力も持たないのである。したがって、女性作家ケアリの手によるヒロインは雄弁であるのに対し、男性劇作家マッシンジャーの作品のヒロインへの抑圧は緩和することがない。すなわちマッシンジャーという男性主体がヒロインに対する抑圧を意図的に行っている反面、伝記的にも抑圧され続けかつ、執筆によって主体性を求め続けた女性であるケアリは自らの持ち得なかった力や理想像をヒロインに託しているともいえる。

それぞれの作品を同一の材源の翻案として捉えた上で、作者のジェンダーによって作品におけるジェンダーの比重や関係性に変化が生じていると述べたが、それだけでなく、作者達の置かれていた状況、そして社会の要請といったものもそれぞれのプロットに大きな影響を与えている。マッシンジャーは商業的劇作家であり、共作が多かったことから独自のスタイル以上にエンターテインメント性の追求に長けていたであろうことは前に述べたが、反対にケアリの戯曲は全く公の場に出ることを想定されたものではないローゼットドラマであったことは創作年代における上流社会の女性のあり方からも明らかである。したがって、それぞれの作者がパブリックとプライベートという正反対の空間においてそれぞれの作品を記した

わけであり、同時にその二空間はそのまま当時の男性、女性、それぞれが占有していた空間そのものであった。マッシンジャーが先輩作家との共作の結果、時代の流れにそった要請を取り入れた公に発信すべく作品として劇作を行ったのならば、ケアリは私小説ならぬ私戯曲的要素を前面に打ち出した作品を創作したともいえる。この2作の翻案の場合、その発信された空間が顕著に当時社会的にそれぞれのジェンダーの占めていた空間と重なることから、両者の思考が如実に投影されているといえるのではないだろうか。

6.

エリザベス・ケアリの『メアリアムの悲劇』とフィリップ・マッシンジャーの『ミラノ公爵』は創作年代が約10年離れており、また同一の歴史書と同箇所を材源としている戯曲であるが、作者の性別、そして作家としておかれていた環境の違いからも異なるプロット展開を見せているといつてよい。女性の手による『メアリアムの悲劇』では女性に、男性の手による『ミラノ公爵』では男性に劇作家的な悪役が割り振られ、プロットを支配しているといえる。また、いずれの作品においても、作者と性別を同じくする主人公の美点のみが材源の誇張をそのまま受けており、いずれの作者も自身と同じジェンダーに重きを置いて創作を行っていることは明らかである。すなわちなんらかの形で作者が登場人物に語りの代償を行わせているとも考えられるが、特にその傾向が顕著なのはケアリ作品であり、一方商業的エンターテインメント性を感じさせるマッシンジャー作品にはミソジニーが色濃く感じられる。各々の作品が置かれていたパブリック/プライベートという立場はそのまま当時の男性、女性が発言権を与えられていた場所であり、この二人の劇作家による翻案は、それぞれのジェンダーに許されていた領域内で可能であった発言、主張の投影であると考えられる。したがって、一つの材源を元にした男性商業劇作家戯曲と女性の私的な戯曲はそれぞれ同時代の社会的要請、ジェンダー観を大いに反映した翻案であるといえるのではないだろうか。

注

¹ メアリアムの処刑のエピソードに関しては、ジャーヴァス・マーカム、ウィリアム・サンブソン共作の『ヘロデとアンティパタ、および美しきメアリアムの死』(1619～22)でも劇化されている。

² ヨセフス、『ユダヤ古代誌』4巻, p.388

³ ヨセフス、『ユダヤ古代誌』4巻, p.381

⁴ ヨセフス、『ユダヤ古代誌』5巻, p.37

⁵ ヨセフス、『ユダヤ古代誌』5巻, p.76

⁶ ヨセフス、『ユダヤ古代誌』5巻, p.80

⁷ この作品数はHoward p.2に準拠しているが

⁸ サロメの夫コストバロスの処刑を巡るエピソード、および彼の裏切りの疑いのプロットは材源どおりである。サロメの離婚を巡って、女性から離婚を申し立てられないというユダヤの法に関しては材源でも言及はあるが、サロメの抗弁の強さはケアリ版特有。

⁹ 特に象徴的なのが、ケアリによる息子2人の誘拐事件である。息子2人をカトリックの司祭として教育するために、ケアリは長男ルシウスの屋敷から彼らを誘拐し、フランスへと送ったことが伝記に記されている。

参考文献

Belsey, Catherine. *The Subject of Tragedy: Identity and Difference in Renaissance Drama*. London: Methuen, 1985.

Callahan, Dymna. 'Re-Reading Elizabeth Cary's *The Tragedy of Mariam. The Fair Queene of Jewry*.' *Women, 'Race', and Writing in the Early Modern Period*. Eds. Margo Hendricks and Patricia Parker, NY: Routledge, 1994.

Cary, Elizabeth. *Elizabeth Cary Lady Falkland Life and Letters*. Ed. Heather Wolfe. Arizona: RTM Publications, 2001.

- 'The Tragedy of Mariam.' *Renaissance Drama by Women*. Eds. S.P. Cerasano, and Marion Wynne-Davies. London: Routledge, 1995.
- *The Tragedy of Mariam the Fair Queen of Jewry: With the Lady Falkland: Her Life*. Eds. Barry Weller, and Margaret W. Ferguson. Berkeley: California UP, 1994.
- Dolan, Frances E. *Whores of Babylon : Catholicism, Gender, and Seventeenth-Century Print Culture*. New York: Cornell University Press, 1999.
- Fisher, Sandra K. 'Elizabeth Cary and Tyranny, Religious and Domestic.' *Silent but for The Word: Tudor Womens as Patrons, Translators and Writers of Religious Work*. Ed. Margaret P. Hannay. Kent, Ohio; Kent State UP, 1985: 225-37.
- Howard, Douglas. Ed. *Philip Massinger: A Critical Reassessment*. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Krontiris, Tina. *Oppositional Voices: Women as Writers and Translators in the English Renaissance*. London: Routledge, 1992.
- Massinger, Philip. *Selected Plays of Philip Massinger: The Duke of Milan, The Roman Actor, A New Way to Pay Old Debts, The City Madam*. Ed. Colin Gibson. Cambridge: Cambridge UP, 1978.
- 河合祥一郎『シェイクスピアの男と女』中央公論社, 2006年.
- 楠明子『英国ルネサンスの女たち—シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』みすず書房, 1999.
- 中村裕英『様々なる結婚のディスコースと女性主体—シェイクスピア、エリザベス・ケアリ、ミドルトン』溪水社, 2001.
- フラウィウスヨセフス 秦剛平訳『ユダヤ古代誌』筑摩書房, 2000.
『ユダヤ戦記』筑摩書房, 2002.